高知県香南市発掘調査報告書　第 16 集

高田（たかだ）遺跡

― 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2020.3

香南市教育委員会

高田（たかだ）遺跡

― 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2020.3

香南市教育委員会

序

本書は、高規格道路南国安芸道路建設計画による住宅移転に伴って、香南市教育委員会が平成27年度に調査を実施した高田遺跡の発掘調査報告書です。

高田遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての遺物散布地として知られていた遺跡です。平成27年度から30年度にかけて、(公財)高知県埋蔵文化財センターにより、南国安芸道路建設に伴う発掘調査が行われました。この調査で多くの遺構・遺物が確認され、高田遺跡が弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになりました。弥生後期から古墳時代初頭にかけての集落跡、古代の掘立柱建物群や幅約10.4ｍの官道(南海道)など、大きな成果が得られています。

今回の発掘調査は調査面積100㎡足らずの小規模なものです。奈良～平安時代の土師器や須恵器、江戸時代(18～19世紀)の陶磁器などが確認され、細片ではありますが、遺跡の性格を示す製塩土器や赤彩土師器、黒色土器も出土しています。高規格道の発掘現場から60～70ｍ程離れた南側にも、古代及び近世の集落が広がっていることがわかりました。

地域の歴史は、地道な発掘調査の積み重ねによって初めて明らかになります。本書が地域史の研究に寄与し、文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際しまして、埋蔵文化財への深いご理解とご協力を賜りました地権者様はじめ、地元の皆様方に心から謝意を表すとともに、報告書作成にあたりご指導ならびにご教示頂きました高知県教育委員会文化財課、(公財)高知県埋蔵文化財センター、そして発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方に心から厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

香南市教育委員会

教育長　　入　野　　博

例言

1．本書は、高規格道路南国安芸道路建設計画を原因とする住宅移転（個人住宅建築）に伴い、平成27年度に香南市教育委員会が実施した高田遺跡の発掘調査報告書である。
2．高田遺跡は、高知県香南市野市町下井に所在する。
3．発掘調査は平成27年8月24日から同年9月15日にかけて実働8日間実施し、9月28日に埋め戻し作業を行った。発掘調査面積は64㎡である。
4．整理作業は、基礎整理を平成27年度に行い、本報告書作成に関する整理作業を令和元年11月1日～令和2年3月19日にかけて実施した。
5．発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成27年度

生涯学習課長	近森　孝章
文化振興保護係長	寺内より子
主　　任	小川　哲弘
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	藤方　正治

令和元年度

生涯学習課長	小松　靖生
文化振興保護係長	竹中　ちか
主　　査	澤田　秀幸
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	横山　藍
埋蔵文化財調査員	坂本　憲彦

6．本書の執筆・編集及び写真撮影・遺構図版の作成は松村が行った。令和元年度の遺物実測及びトレース、図版作成作業は齋藤美幸が行った。
　報告書作成時の整理作業員は以下のとおりである。
　　齋藤美幸・澤田佐世・高橋加奈・高橋由香・藤方正治・藤原ゆみ・松田克純
7．遺構については、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝)、P(ピット)、SX(性格不明遺構)とし、遺構には必要に応じて遺構番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSAはS=1/100、SK、SX、P、SDはS=1/40、全体図はS=1/60で作成しそれぞれに記載している。
　方位(N)は世界標準座標方眼北である。
8．遺物については、縮尺を原則S=1/3とし、石器についてはS=1/2で掲載し、各遺物にはスケールバーを掲載している。
9．現場作業及び整理作業（平成27年度）については下記の方々に行って頂いた。（敬称略、五十音順）
　発掘調査作業
　　植田秀雄・大野久雄・川村正廣・宗圓良一・永野宏幸
　重機オペレーター
　　清藤勝秀

整理作業

齋藤美幸・澤田佐世・宮本幸子

また、報告書作成にあたっては香南市文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。

10. 出土遺物等について、池澤俊幸・筒井三菜((公財)高知県埋蔵文化財センター)、藤方正治・横山藍(香南市文化財センター)の各氏に助言を頂いた。記して感謝する。
11. 調査の実施にあたっては、地元の方々の協力と援助を得た。
12. 出土遺物の注記は、出土略号を15-2ＮＴ(本発掘調査)・15-シ4ＮＴ(試掘調査)とし、図面・写真資料とともに香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553-1)において保管している。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る契機と経過 …… 1
1．調査に至る契機と経過 …… 1
2．試掘確認調査の概要 …… 2
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境 …… 5
1．遺跡の所在する香南市 …… 5
2．高田遺跡周辺の遺跡と香南市の遺跡 …… 6
第Ⅲ章　調査成果 …… 11
1．調査の方法 …… 11
2．基本層序 …… 12
3．検出遺構と出土遺物 …… 14
(1)ピット(P)及び柵列(SA) …… 15
(2)性格不明遺構(SX) …… 17
(3)浅い皿状の土坑(SK) …… 20
(4)溝状遺構(SD) …… 21
(5)包含層出土遺物 …… 24
第Ⅳ章　考察(高田遺跡調査のまとめ) …… 27
1．遺構 …… 27
2．遺物 …… 28
(1)古代 …… 28
(2)近世 …… 28
3．高田遺跡調査のまとめ …… 28

挿図目次

第 1 図　高知県香南市位置図 …… 1
第 2 図　調査対象地と試掘トレンチの位置及び検出遺構平面図(S=1/200) …… 2
第 3 図　試掘トレンチ(TR1・2)セクション図(S=1/40) …… 3
第 4 図　高田遺跡試掘調査 出土遺物実測図(S=1/3) …… 4
第 5 図　高田遺跡包蔵地範囲と調査対象地(S=1/5,000) …… 4
第 6 図　物部川・香宗川下流域の地質構造帯と遺跡 …… 5
第 7 図　高田遺跡と周辺の遺跡(S=1/30,000) …… 7
第 8 図　調査対象地(S=1/400)と設定したグリッド(S=1/200) …… 11
第 9 図　調査区セクション図(S=1/40) …… 13
第10図　遺構完掘平面図(S=1/60) …… 14
第11図　ピット列1～5 平面図(S=1/100) …… 15
第12図　ピット列1(SA1) 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 15
第13図　ピット列2(SA2) 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 16
第14図　ピット列3 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 16
第15図　ピット列4 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) …… 16
第16図　ピット列5 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 17
第17図　その他のピット　平面・エレベーション図(S=1/40) …… 17
第18図　SX1 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3) …… 18
第19図　SX3・4　平面・セクション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3) …… 18
第20図　SX5 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3) …… 19
第21図　SK1 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3) …… 20
第22図　SK2～4 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 20
第23図　SD1 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/2・1/3) …… 21
第24図　SD2～7・9 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 22
第25図　SD8・P40 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 22
第26図　SD10・P33 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 23
第27図　SD11 平面・エレベーション図(S=1/40) …… 23
第28図　包含層出土遺物実測図1　古代(S=1/3) …… 25
第29図　包含層出土遺物実測図2　近世陶磁器(S=1/3)及び石器(S=1/2) …… 26

遺構計測表目次

遺構計測表1　SA及びピット列 33
遺構計測表2　ピット列1(SA1) 33
遺構計測表3　ピット列2(SA2) 33
遺構計測表4　ピット列3～5..... 33
遺構計測表5　その他のピット 33
遺構計測表6　SX　土坑あるいはピット 34
遺構計測表7　SK　浅い皿状土坑 34
遺構計測表8　SD　溝状遺構 34

遺物観察表目次

遺物観察表　1～20 37
遺物観察表　21～38 38

写真図版目次

扉　調査に参加した方々

図版1　調査前の景観（北東より）
調査前の景観（南東より）
試掘 TR1 堆積状況と景観（東より）
試掘 TR1 堆積状況（東より）
試掘 TR2 SD1 検出（東より）
試掘 TR2 SD1 検出（西より）
試掘 TR1（東より）
試掘 TR2（南より）
図版2　表土掘削（南より）
調査区の設定　南西端（西より）
南西端サブトレと SX2 の検出（東より）
SX3・4 検出（南より）
SX2 断面と調査区西壁の堆積（東より）
図版3　試掘 TR2 西壁セクション
試掘 TR2 南壁セクション
SX1 遺物出土状況
SX1 遺構西半の礫検出状況
SX1 と P1（東より）
図版4　SX3・4セクション（南より）
SX3・4遺構と堆積状況（南より）
SX1 西半の礫と検出された SD1（東より）
SX1 完掘状況（西より）
検出された SD1 と SX1 完掘状況（東より）
図版5　調査風景（調査区南端）
調査風景（SX3・4）
調査風景（SX1）
調査風景（調査区南西端）
調査風景（調査区中央）
調査風景（SX3）
調査風景（包含層掘削作業）
調査風景（下層遺構検出作業）
図版6　調査区南の検出遺構　SK1・P9（西より）
SK1 遺物出土状況（東より）
調査区南西の検出遺構（西より）
調査区北東の検出遺構（北より）
調査区北西の検出遺構（南より）

図版7　調査区北壁セクション（南より）
検出遺構　遺構面3（南より）
検出遺構　遺構面3（北東より）
検出遺構　遺構面3（南東より）
図版8　SD1堆積状況（北より）
SD1と周辺の遺構（南より）
図版9　SD1と周辺の遺構（北より）
P3遺構内円礫出土状況
P4遺構内円礫出土状況
調査区南端の遺構調査
SX5の調査
SX5（南東より）
SX5（南より）
図版10　遺構完掘状況（西より）
遺構完掘状況（北東より）
遺構完掘状況（北より）
遺構完掘状況（北西より）
遺構完掘状況（南より）
図版11　遺構完掘状況（東より）
遺構完掘状況（北より）
図版12　遺構出土遺物
SX1(1～5)　SX3(6)　SX4(7)　SX5(8)
SK1(9)　SD1(10・11)
図版13　包含層出土遺物(1)古代
13～28
図版14　包含層出土遺物(2)近世陶磁器及び石器
（遺構出土石器含）SD1(12)
29～38

第Ⅰ章　調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機と経過

高知東自動車道は、高規格幹線道路網を構成する国道として整備される自動車専用道路である。このうち、高知南国道路(総延長15km)については平成2年10月に都市計画決定、同年以降事業化され整備が進められている。一方、高規格道路南国安芸道路建設の都市計画決定は平成11年6月、高知龍馬空港ＩＣ～芸西西ＩＣ間(総延長12.5km)については翌12年度から事業化された。現在、香南市域では香南のいちＩＣ～芸西西ＩＣ間が開通、また、芸西西ＩＣ以東についても平成23年度には事業化され整備が進められている。

一部開通した南国安芸道路は、慢性的な混雑緩和とともに、南海トラフ地震等災害時に緊急支援物資の輸送、救急救命の道として重要な役割を果たすようになった。今後さらに「広域的交通の高速性、安全性の確保」「国道沿線地域の生活環境改善」「地域活動の活性化」など全面開通による効果が期待されている。(「とさこく」ホームページより・土佐国道工事事務所)

道路建設予定地の埋蔵文化財への対応は、平成15年以降、高知県教育委員会及び財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）によって行われ、平成16年度以降、本発掘調査が始まった。

平成27年7月、この高規格道路南国安芸道路建設計画に伴う住居移転予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「高田遺跡」の範囲内となることが明らかになり、建築に先行して試掘確認調査を行うこととなった。移転予定地は香南市野市町下井字ムノ丸735番地4・737番地6である。試掘確認調査は平成27年8月3日に実施、2ヶ所設定した試掘トレンチのうち1ヶ所から遺物包含層と近世以前に形成された遺構を検出した。遺構は住宅建築で影響を受けない深さだが、建築予定地のう

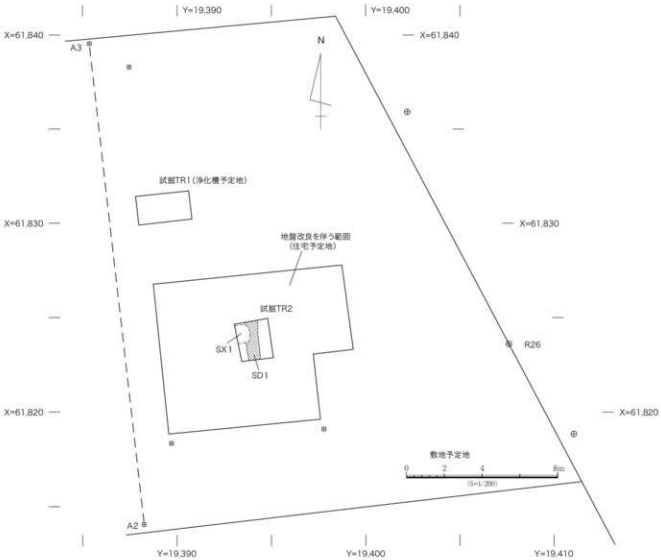
第1図　高知県香南市位置図

ち、住宅部分のみ地盤改良のため影響を受けることが判かった。高知県教育委員会文化財課と協議、地権者の同意を得たうえで、8月下旬から住宅予定地について本発掘調査を実施することとなった。

8月14・15日に事前測量を行い、8月24日から調査を開始した。現場での発掘作業日数8日間、埋め戻し作業まで含めた調査期間は8月24日から9月28日までである。

2. 試掘確認調査の概要

試掘確認調査は平成27年8月3日に実施した。設定したトレンチは2ヶ所、調査対象面積は465.09㎡、調査面積は9㎡である。試掘トレンチ1(TR1)は対象地北半の浄化槽建設予定地点に、試掘トレンチ2(TR2)は対象地南半の住宅建築予定地中央付近に設定した。重機を使って掘削、遺物の有無・堆積状況を確認しながら調査を進め、遺構確認後は人力により掘り下げ、出土遺物・遺構の写真撮影・測量を行った。



第2図　調査対象地と試掘トレンチの位置及び検出遺構平面図(S=1/200)

TR1

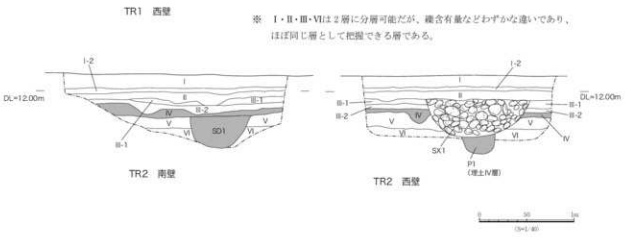
調査対象地北半浄化槽予定地付近に設定したトレンチである。平面規模は1.5m×3.2m、現地表面下約25～40cmに遺物包含層を確認したが、数点の細片を検出できたのみである。遺物は土師器の細片5点と陶磁器類の細片4点で、土師器の詳細な時期判別は困難だが、陶磁器細片は胎土・釉調から18～19世紀の遺物だと判断される。試掘トレンチの範囲では遺構は確認できなかった。

TR2

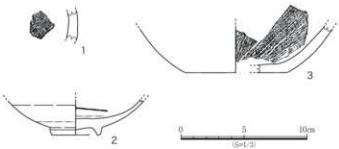
調査対象地南半の住宅予定地中央付近に設定したトレンチである。平面規模は2m×2m、現地表面下20cmのⅡ層から45cmのⅣ層までが遺物包含層であり、Ⅲ層上面とⅤ層上面に遺構を確認した。検出された遺構は、Ⅲ層上面に形成された性格不明遺構（埋土に円礫の集中する土坑・SX1）とSX1の遺構底面で検出された残存径22cmのピット(P1)、Ⅴ層上面で検出された南北方向にのびる溝状遺構(SD1)である。SX1調査中に出土した第４図１～３の遺物と土師器供膳具の細片が５点出土している。１は製塩土器の小片で、内面に布目圧痕が残る。２は陶器皿の底部、３は炻器・擂鉢の底部で、胎土から備前と考えられる。近世後期の資料だと推定されるが、詳細な時期等は不明である。

試掘トレンチの堆積状況

２つの試掘トレンチとも同様の堆積を示している。Ⅰ層が現耕作土の灰褐色粘土質シルト、Ⅱ層が礫混灰褐色粘土質シルトであり、SX1はこの層の下から検出された。Ⅲ層は灰褐色粘土質シルトで２層に分層可能である。Ⅳ層は黒褐色シルト質粘土で、下層の遺物包含層となっている。Ⅱ層、Ⅲ層も遺物を含むがいずれも遺物量は少ない。Ⅴ層は小礫を含む褐色の粘土層で、Ⅴ層上面に遺構が形成されている。Ⅰ～Ⅴ層は粘土あるいはシルトの堆積により形成された層だが、これに対してⅥ層は円礫を多く含む堅く締まった層で、黄褐色を呈する層である。



第3図　試掘トレンチ（TR1・2）セクション図(S=1/40)



第4図　高田遺跡試掘調査　出土遺物実測図(S=1/3)

調査地点は高田遺跡の包蔵地範囲中央付近に位置する。2ヶ所設定したトレンチの南側TR2で遺構が確認された。北側のTR1からも遺物は出土しているが、細片が数点程度と僅少で、時期が確認できるものはいずれも近世後期以降の遺物である。南側のTR2では2面の遺構面が確認されている。Ⅲ層上面に形成される遺構面①とⅤ層上面に形成される遺構面②である。

遺物は近世・古代の2時期以上の遺物が混在している。出土遺物で注目されるのはⅡ類製塩土器の存在で、古代前期8～9世紀当時の調査地点が一般集落とは異なる特別な意味を持つ地点だったことがわかる。

Ⅰ層が現耕作土でⅡ層～Ⅳ層に遺物が含まれている。地表下50～60cm以下には円礫を含む堅く締まった層（Ⅵ層）が広がっている。この礫層（あるいは礫混じり粘土質シルト層）は野市台地に広く分布する洪積層である。

遺構面①は地表下25cm付近に、遺構面②は地表下40cm付近に形成されている。住宅建築時には浄化槽部分以外は遺構が工事の影響は受けないが、住宅の建築範囲に限定して実施される地盤改良の影響は受ける。今回の住宅建築対象地南側には遺構の広がりが予想され、地盤改良が予定される範囲については本発掘調査が必要だとの判断に至った。

第5図　高田遺跡包蔵地範囲と調査対象地(S=1/5,000)

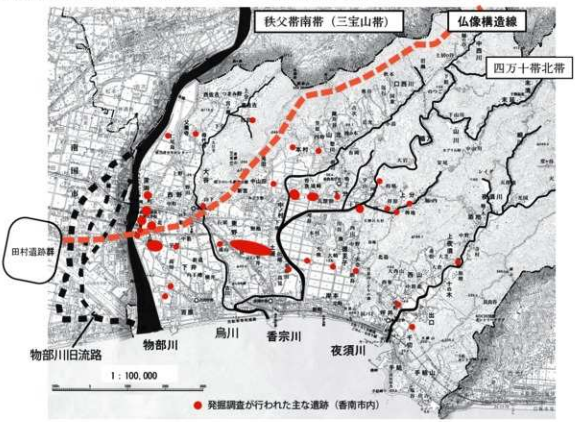
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1. 遺跡の所在する香南市

香南市は、高知県中央部高知平野東端に位置する。当市は平成18年3月に赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村5ヶ町村の合併により誕生した自治体である。面積126.49㎢、人口33,340人（令和元年12月末）、土佐湾に面し、海岸線から四国山地に連なる山岳地帯まで、恵まれた自然環境を活かした農業、漁業を中心とした1次産業が盛んな地域である。生産額日本一のニラや山北みかんのブランドで知られる温州みかんなど、特産物も多い。

山間部では過疎化が進み、集落の維持が課題となっている。それでも、地域ごとに多くの文化財が守り伝えられており、市内には国指定8件、県指定16件、市指定98件、あわせて122件の文化財が指定文化財として保護対象となっている。日本で唯一残る香我美町徳王子若一王子宮の「烏喰儀（からすぐいのぎ）」（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）に代表される無形文化財も、各地域で現在まで伝承されている。

市の北側には標高200mから500m程の山地が連なり、西端の三宝山（金剛山・標高265m）から東側の秋葉山（標高489.5m）、さらに北東の四国山地へと続いている。この山地に沿って、2つの地質構造帯を分ける仏像構造線が走る。北側が秩父帯南帯、南側が四万十帯北帯であり、秩父帯南帯は、当地のランドマークである三宝山の名前をとって、「三宝山帯」と呼ばれている。構造線の南北の岩石層は似通っている。ともに中生代に形成された付加体で、石灰やチャートの岩塊を含み、山稜には龍河洞や鬼ヶ岩屋洞窟に代表される多くの石灰岩洞窟（鍾乳洞）や岩塊が分布している。



第6図　物部川・香宗川下流域の地質構造帯と遺跡

2. 高田遺跡周辺の遺跡と香南市の遺跡～発掘調査により明らかになった地域の歴史～

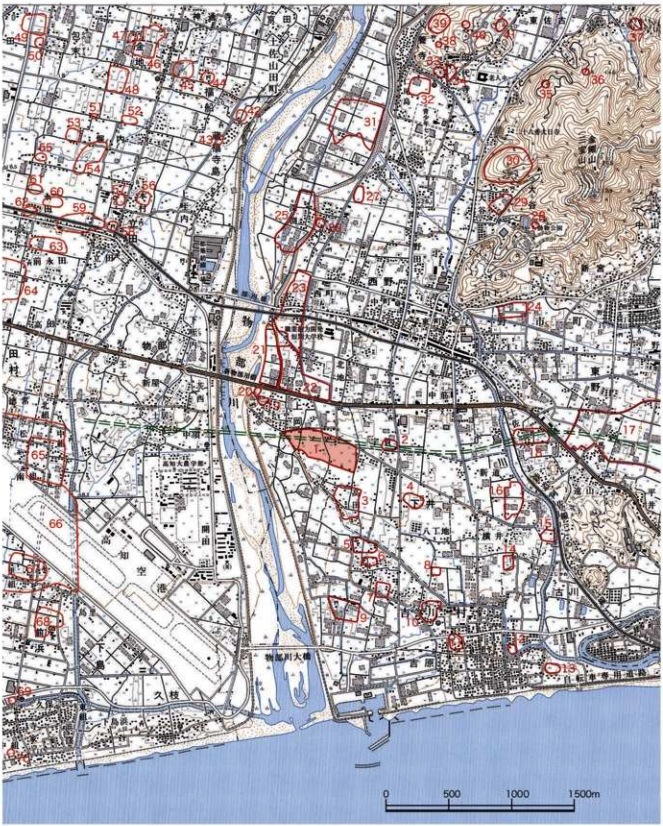
遺跡は野市町下井に所在する。周知の埋蔵文化財包蔵地「高田遺跡」の範囲は南北約 200m、東西約 600m の範囲に広がっている。物部川左岸の野市台地段丘崖に沿って、当遺跡の南北約 3km の範囲に遺跡が集中する。北から順に、深渕遺跡・西野遺跡・北地遺跡・下ノ坪遺跡・上岡北遺跡・上岡遺跡・高田遺跡・下高田遺跡の各遺跡が並び、高田遺跡の南北に遺跡が連続する。その多くは段丘面の上に形成されるが、深渕遺跡や下ノ坪遺跡など段丘下段にも遺構・遺物の集中する重要な遺跡がある。

この地域に土器が多く出土することが知られるようになったのは、昭和 50 年代に入ってからである。野市町在住の郷土史家河野通信氏や高知県職員濱田眞尚氏(現香南市文化財保護審議会委員)

No.	遺跡名	時代
1	高田遺跡	弥生～中世
2	宇賀遺跡	古代～中世
3	下高田遺跡	古代～中世
4	下井遺跡	古代・中世
5	野口遺跡	弥生～中世
6	射場屋敷遺跡	弥生～中世
7	吉原遺跡	中世
8	八丁地遺跡	古代
9	東狭間遺跡	弥生～古代
10	八反遺跡	中世
11	浜口遺跡	弥生・古墳
12	南中曽遺跡	弥生・古墳
13	住吉砂丘遺跡	弥生
14	小屋敷遺跡	中世
15	横井ウノ丸遺跡	古代～中世
16	横井ナノ丸遺跡	中世～近世
17	東野土居遺跡	旧石器～近世
18	東野遠山遺跡	古代・近世
19	上岡遺跡	弥生・古代
20	上岡北遺跡	弥生・近世
21	下ノ坪遺跡	弥生～古代
22	北地遺跡	弥生～中世
23	西野遺跡	弥生～中世
24	山下遺跡	古代・中世
25	深渕遺跡	弥生～中世
26	深渕城跡	中世
27	西上野遺跡	弥生
28	大谷古墳	古墳
29	大谷遺跡	古墳・古代
30	大谷城跡	中世
31	深渕北遺跡	弥生～中世
32	母代寺遺跡	古代・中世
33	城八幡城跡	中世
34	母代寺土居屋敷遺跡	古代～中世
35	竹ノ内(溝渕山)古墳	古墳

No.	遺跡名	時代
36	アゴデン窯跡	古代
37	白岩窯跡	古代
38	父養寺古墳	古墳
39	父養寺城跡	中世
40	日吉山古墳群	古墳
41	亀山窯跡	弥生・古代・中世
42	東屋敷遺跡	中世
43	ヲサガ渕遺跡	奈良～中世
44	岩村土居城跡	中世
45	若宮遺跡	弥生～平安
46	垣添遺跡	古墳～中世
47	包地土居城跡	中世
48	芝田遺跡	古墳～中世
49	包末井ノ内遺跡	縄文・古墳～平安
50	包末土居城跡	中世
51	屋根添遺跡	古墳
52	芝ノ端遺跡	古墳
53	石神遺跡	弥生～平安
54	古流曽遺跡	古墳～平安
55	柚木内遺跡	古墳～平安
56	立田土居城跡	中世
57	北角田遺跡	弥生～平安
58	徳弘土居城跡	中世
59	寺ノ前遺跡	弥生～中世
60	大北遺跡	古墳～中世
61	上横田遺跡	古墳～平安
62	平杭遺跡	弥生・古墳
63	高添遺跡	弥生～平安
64	修理田遺跡	弥生～平安
65	田村城跡	中世
66	田村遺跡群	縄文～近世
67	千屋城跡	中世
68	司例田遺跡	古墳～近世
69	中屋敷遺跡	弥生
70	前浜砲台跡	近世

表 1　　高田遺跡周辺の遺跡名



第７図　高田遺跡と周辺の遺跡（S=1/30,000）

らによって採取された土器により、このエリアに遺跡が集中していることが明らかになる。これらの遺物については、高知女子大学岡本健児教授、野市町史考古編を執筆した廣田典夫氏らにより詳細な分析が加えられ、遺跡の時期や性格など広く紹介されることとなった。

しかし、1980 年代までは高田遺跡近隣の発掘調査例はほとんどなく、遺跡の内容が明らかになるのは 1990 年代中頃以降、開発や道路建設に伴う発掘調査が本格化してからである。

高田遺跡の南方にも野口遺跡、射場屋敷遺跡など弥生時代～古代の遺跡が、野市台地末端の段丘面に沿って続く。平成 29 年、津波避難タワー建設予定地で新たに確認された東狭間遺跡は、物部川河口近くの沖積平野に立地する弥生終末と古代を中心とした時期の遺跡で、弥生古墳移行期の土器の密集する竪穴建物が確認されている。

香南市域では市の西側と中央部を流れる２つの河川、物部川と香宗川沿いに遺跡が分布することが知られている。香宗川水系では、野市町から香我美町にかけて圃場整備・河川改修等に起因する発掘調査が 1980 年代から 1990 年代にかけて行われ、曽我遺跡・下分遠崎遺跡・拝原遺跡・十万遺跡・稗地遺跡・幅山遺跡など、川沿いに一定の間隔で弥生時代から古代・中世にかけての集落が点在することが明らかになった。

縄文時代の遺跡は市内で５遺跡と少ない。発掘調査で縄文土器（後・晩期）が出土した遺跡は拝原遺跡・十万遺跡・庭ヶ渕遺跡と、香宗川流域に限定されている。庭ヶ渕遺跡からは縄文晩期の竪穴建物と縄文弥生移行期の孔列文土器、北陸系の搬入土器など注目される遺物も出土している。

弥生時代以降、遺跡数が増加するが、中でも特筆されるのは弥生時代の多彩な自然遺物が出土し、「土佐の登呂遺跡」と称された下分遠崎遺跡である。弥生前期から中期にかけて継続する集落で、鍬や杵、祭祀具など生活の様子を示す木製品、ツキノワグマやカツオの骨など獣骨・魚骨、様々な種子などの植物遺体が多量の土器とともに出土した。炭化米もまとまって出土、当時のＤＮＡ鑑定で熱帯ジャポニカと判定され注目を集めた。10 年後の炭化米ＤＮＡ再鑑定では、ジャポニカやインディカなどいくつかの品種の存在が明らかになり、多様な品種が混在したといわれる弥生時代の水田の様相を裏付ける結果となった。

高知平野の他地域同様、古墳時代への移行期３世紀になると集落数は急増し、４世紀になると激減する。流域の拝原遺跡からは、県内でも例の少ない古墳時代前期（古式土師器Ⅲ期・４世紀）の竪穴建物が確認されている。

曽我遺跡と十万遺跡は古代の官衙関連遺跡として注目される遺跡である。十万遺跡からは石製巡方も出土、８世紀の建物跡が 14 棟確認されるなど官衙関連の遺跡だと考えられている。曽我遺跡は９世紀を中心とした時期の建物跡８棟が確認され、出土した緑釉陶器 45 点は県内で最多である。

香宗川流域の近年の発掘調査で注目される遺跡に、東野土居遺跡がある。南国安芸道路建設に伴う調査で、弥生時代から近世にかけて、３世紀の竪穴建物 86 棟が検出された大規模な集落、古墳時代後期 6～7 世紀の竪穴建物 28 棟が検出された集落、中世後期の環濠で囲まれた豪族屋敷、近世の農村に関する調査成果など、時代ごとの景観復原に資する情報が得られている。この遺跡からは、単独出土だが、後期旧石器時代（約２万５千年前）の角錐状石器、縄文時代草創期（約１万年前）の有舌尖頭器も出土、野市台地の歴史が旧石器時代まで遡ることが初めて確認された。

高知平野の東部を代表する河川が物部川である。四国山地を源流に、本流の河川延長 71㎞、流域面積 508㎢の１級河川である。流域には遺跡が集まっており、上流から下流にかけての段丘上に

は旧石器時代から近現代まで、各時代の遺跡の存在が知られている。下流域では右岸の扇状地にも多くの遺跡が立地している。高田遺跡の対岸には、南四国を代表する弥生時代の拠点集落田村遺跡群があり、左岸香南市側の段丘上と同様、遺跡が密集している。

物部川左岸の高田遺跡の北側一帯は、条里制の遺構の残存（下ノ坪条里遺構）、南海道推定地など特別な場所だと認識されてきたが、近年の発掘調査で周辺に古代の官衙関連遺跡が広がっていることが明らかになった。

平成6年（1994）から平成8年（1996）にかけて調査された下ノ坪遺跡は、律令期を中心とする古代に関する重要な情報をもたらした。県内でも最大級の一辺17mの掘立柱建物が確認され、コの字形に配置された建物の柱跡から四仙騎獣八稜鏡が出土している。郡衙関連の川津ではないか、と注目される遺跡である。下ノ坪遺跡上段の西野遺跡と高田遺跡からは東海系の緑釉陶器が出土した。墨書土器が出土した北地遺跡、西野遺跡、下ノ坪遺跡、高田遺跡など、8～9世紀の律令期を中心とした時期、高田遺跡から北側へ続く一帯に、官衙関連の施設あるいは居館が広がっていたと考えられる。平成30年度の高田遺跡の調査では、表面に火山灰アカホヤが敷き詰められた幅約10.4mの道路遺構（8世紀の官道・南海道）の存在が明らかになった。

遺跡周辺での古代の様相は注目すべきものだが、近年、江戸時代以降の発掘調査例も増加しつつある。高知城下町遺跡の発掘調査に代表されるように、県内各地で近世を対象とした発掘調査が大きく進展し、文献資料や地図史料など従来の研究手段で明らかにできなかった「記録に残らない部分」についても解明されるようになってきた。埋蔵文化財を研究対象とする考古学の果たす役割は大きい。

17世紀中葉に物部川は下流域の流路を変える土木工事により、南へ向かう直線的な流路となった。山内家の家老野中兼山の執政期のことである。高田遺跡の北東にある上岡山付近が特に難工事だったと伝わっている。当時の物部川下流域（現在の流路付近）には肥沃な耕作地が広がっていたが、この工事のため耕作地は失われた。上岡北遺跡の調査（1997年度）では、江戸時代に築かれた石積みの堤防が発掘調査で確認された。この堤防は江戸時代中期・寛政元年（1789）の五藤家絵図にも描かれている。当時の野市町教育委員会の適切な対応により工事計画は変更され、堤防が現地で保存されている。

香南市域における発掘調査は、弥生時代や古代など中世以前の歴史解明に大きな成果を上げてきたが、上岡北遺跡の調査以来、香南市でも近世に正面から取り組む調査が行われるようになっている。野市台地中央部から香宗川付近にいたる東野土居遺跡の調査は、弥生・古墳・古代・中世の歴史を解明するとともに近世村落の姿を明らかにする調査でもあった。

重要文化財安岡家住宅の調査では、建造物の保存修理事業に先行した発掘調査により、建物復原の裏付けを得ることを目的としながら、前身建物の存在など当初意図していなかった多くの新知見が得られている。近世後期から近現代にかけての民家の変遷過程を明らかにする調査の中で、遺跡発掘という手段が大きな役割を果たした点で意義がある。

安岡家住宅のように、近代から戦後にいたるまで調査対象とした事例も増えている。高田遺跡の西隣、上岡山では津波避難路建設に伴う試掘調査が行われ、高知海軍航空隊防衛のための戦闘壕の形態が明らかになった。上岡八幡宮参道の試掘調査では、戦時中に空襲により破損した鳥居に関する調査が行われた。南国市向山戦争遺跡はじめ、戦時中の状況を明らかにするため考古学は欠かせ

ない手段となっている。旧石器時代から現代に至るまで、考古学を手段として用いることで、文字に残されなかった地域の歴史が、一つずつ明らかになりつつある。

参考文献

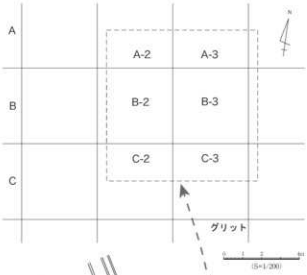
『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988
『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989
『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989
『下分遠崎遺跡発掘調報告書』香我美町教育委員会　1989
『下分遠崎遺跡』（財）高知県埋蔵文化財センター　1994
『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1997
『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998
『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会　2000
『上岡北遺跡』香南市教育委員会　2008
『下分遠崎遺跡Ⅳ』香南市教育委員会　2010
『北地遺跡』香南市教育委員会　2011
『庭ヶ渕遺跡』香南市教育委員会　2012
『西野遺跡ルノ丸地区　2005年度調査』香南市教育委員会　2013
『上岡山戦争遺跡　見学会資料』香南市教育委員会　2013
『重要文化財安岡家住宅「主屋」平成26年度試掘確認調査概要報告書』
香南市教育委員会・香南市文化財センター　2014
『東野土居遺跡Ⅰ』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2014
『東野土居遺跡Ⅱ』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2015
『東野土居遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2016
『東野土居遺跡Ⅳ』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2018
『射場屋敷遺跡』香南市教育委員会　2016
『高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡』高知県教育委員会・（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　2018
『東狭間遺跡』香南市教育委員会　2019
『夜須町史　上』夜須町教育委員会　1984
『香我美町史　上』香我美町史編纂委員会　1985
『野市町史　上』野市町史編纂委員会　1992
『吉川村史』吉川村教育委員会　1999
『赤岡町史　新版』赤岡町史編纂委員会　2008
「秩父帯南帯（三宝山帯）の解釈」田代・川村　（『高知大学学術研究報告　第44巻』）1995
『山田堰井筋20年史』山田堰井筋土地改良区　1984

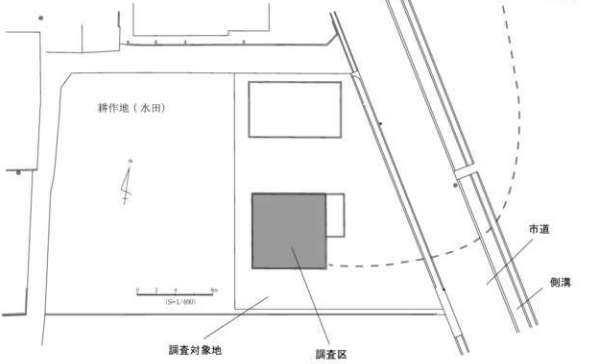
第Ⅲ章　調査成果

1. 調査の方法

調査対象地の現況は耕作地である。事前に行われた試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財が残存し、工事によって影響を受ける地盤改良が予定される範囲に調査区を設定し調査を進めた。建築する建物に対応した8m×8mの調査区で、調査面積は64㎡である。建築予定の建物の方向を基準とする任意のグリッドを設定し、それを元に遺構配置図を作成するとともに、包含層遺物の出土地点を記録した。

調査区を設定した後、重機による表土掘削を行い、包含層掘削及び遺構検出は人力により作業を進めた。掘削した表土は調査対象区西側の水田へ移動、表土より下の地層掘削土については調査区に近接する地点に仮置きし、埋め戻しの際に使用した。検出した遺構については、調査区全体の遺構検出写真を撮影し、遺構配置図の作成を行った。遺構掘削では、必要に応じて半裁の上でセクション図の作成及び写真撮影を行うとともに、平面図(S=1/20及びS=1/10)を作成し、標高を測量した。出土した





第8図　調査対象地(S=1/400)と設定したグリッド(S=1/200)

遺物については必要に応じて出土状態の写真撮影及び平面図及びセクション図(S=1/20及びS=1/10)の作成、標高の測量を行った。

遺構完掘後は、調査区全体の平面図(S=1/20)を作成・標高を測量するとともに、完掘状態を写真撮影した。下層は礫を含む洪積層であり、遺物包含層は認められず、住宅建設予定地であることから、下層堆積状況確認のための掘削調査等は行わなかった。

なお、発掘調査後に住宅建設予定地が調査地点から対象地北側に変更された。新しい建設地点(試掘トレンチ1周辺)は、試掘調査で遺構が存在しないと判断された場所であるため、新たな調査は実施していない。

2. 基本層序

Ⅰ層は灰褐色を呈する粘土質シルトで、地点によっては2層に分層可能である。同時期に形成された層で、現在の耕作土にあたる。

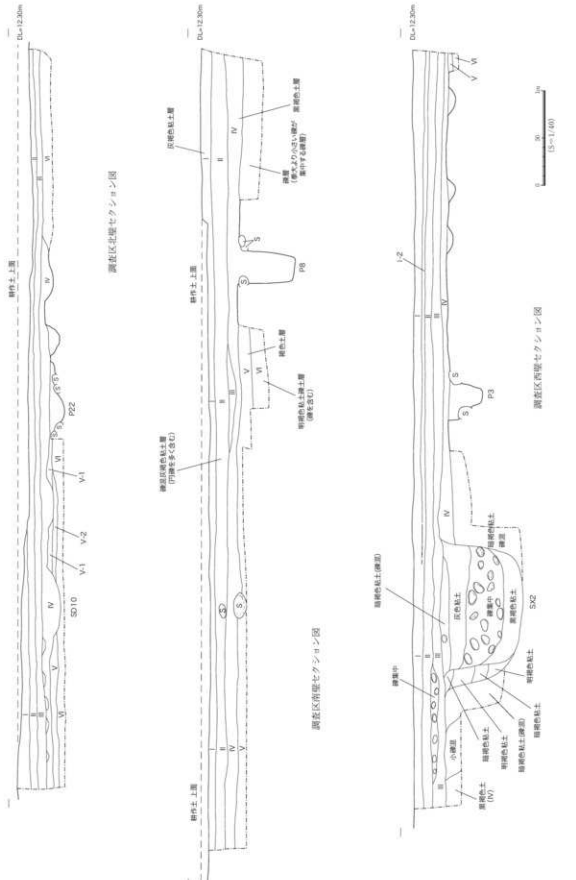
Ⅱ層は礫混灰褐色粘土質シルトである。現耕作土の床土となる層で、円礫を多く含む。Ⅱ層中からは近世と古代の遺物が混在した状態で確認されている。

Ⅲ層は灰褐色粘土質シルトで、地点によっては2層に分層できる。このⅢ層上面が第1遺構面であり、試掘調査時の遺構面①である。試掘調査で確認したSX1はじめ、埋土に円礫が集中、あるいは円礫を埋土に多く含む性格不明遺構が、このⅢ層上面に形成されている。また、Ⅲ層掘削後Ⅳ層上面で検出される遺構もあり、Ⅲ層下面(Ⅳ層上面)を第2遺構面とした。この遺構面は試掘調査時には把握できておらず、本発掘調査時に初めて確認した面である。

Ⅳ層は黒褐色粘土質シルト層で、試掘調査時のSD1及びP1など、黒褐色土を埋土とする遺構は、他の遺構面(第1、第2)より多く検出された。これら黒褐色土埋土の遺構はⅤ層上面およびⅥ層上面に形成されており、複数の時期の遺構が存在する。調査区北東側と南西側には、Ⅳ層及びⅤ層がない部分がある。後世の削平あるいは層形成時の要因(地形の起伏)等によるものと考えられる。層中には火山ガラスに由来する微細ガラス質鉱物も認められるが、量的に少なく、小礫を含む締まりのある層である。周辺一帯に黒ボク土の堆積が知られている。当遺跡の堆積状況から、Ⅳ層黒褐色土は黒ボク土の2次堆積土だと考えられる。

Ⅴ層は礫を含む褐色土であり、堅く締まった粘土質シルト層である。Ⅴ層上面が第3遺構面(試掘調査時の遺構面②)であり、Ⅴ層の堆積がない部分では第3遺構面はⅥ層上面に形成される。この面の遺構には、いくつかの時期差があると想定されるが、埋土から判断することは困難である。

Ⅵ層は円礫を多く含んだ黄褐色土で、極めて堅く締まった層である。野市台地の基盤層にあたり、台地上に広く分布する層である。洪積層であり、Ⅵ層以下に遺構の形成は認められず、埋蔵文化財は確認できない。



第9図　調査区セクション図(S=1/40)

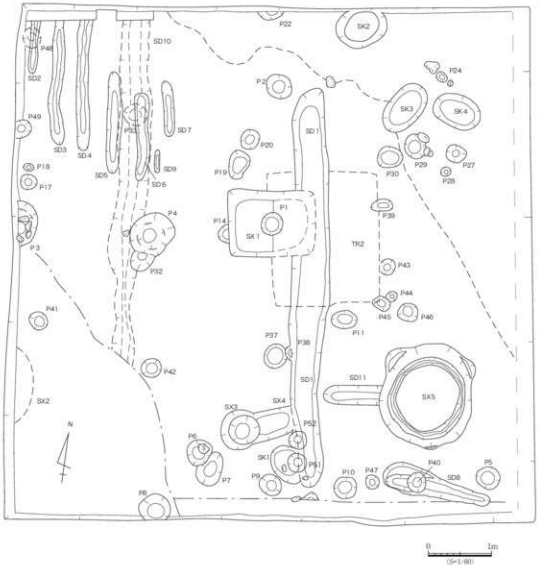
3. 検出遺構と出土遺物

今回の調査で確認した遺構には、平面形が円形で一定の深さを持つ遺構（ピット・P）、浅く皿状の落ち込みのある遺構（土坑・SK）、溝状遺構（溝状の浅い落ち込みも含む・SD）、円礫が集中して投棄された円形あるいは長方形の平面を持つ遺構（性格不明遺構・SX）がある。

検出段階でSX1～5、P1～52、SD1～11、SK1～4の遺構番号を付け調査を進めた。平面形状や遺構調査時の状況から便宜的につけた略号である。検出した遺構の中には、調査を進める中で遺構ではないと判断されるものもあり、最終的に把握できた遺構は、ピット41基、溝状遺構11条、皿状土坑4基、性格不明遺構5基である。

ピットには、その並びから掘立柱建物あるいは柵列などの可能性を想定できるものが5組（5列）あり、調査区が居住域の一角だったことを示している。いずれのピット列も調査区外に延びているため、掘立柱建物跡だと断定できるピット列はない。

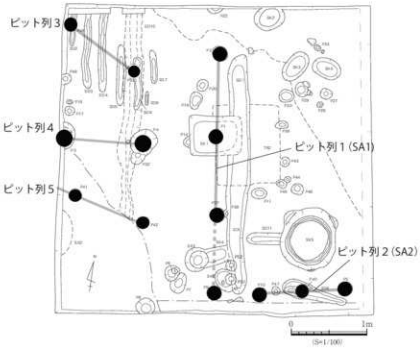
出土遺物から、遺構は近世と古代を中心としたいくつかの時期と推定される。遺構埋土は大別して3種類、円礫を多量に含む埋土、灰褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトである。



第10図　遺構完掘平面図(S=1/60)

円礫が集中する遺構はⅢ層上面（遺構面１）に形成されており、最も新しい時期の遺構である。灰褐色土は主にⅣ層上面（遺構面２）に形成された遺構の埋土である。黒褐色土を埋土とする遺構は、Ⅴ層及びⅥ層上面（遺構面３）に形成された遺構だが、各面ともいくつかの時期の遺構が混在している。

完掘時の遺構については第10図に示した。遺構名については後で変更したものもあるが、基本的に検出時の名称で報告する。以下、調査した遺構を、(1) ピット（P）及び柵列（SA）、(2) 性格不明遺構（SX）、(3) 浅い皿状の遺構（SK）、(4) 溝状遺構（SD）の順に記述を進め、その後で包含層出土遺物について報告する。



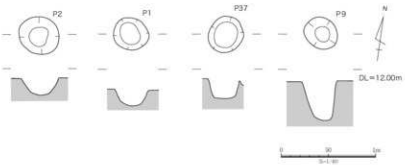
第11図　ピット列１～５　平面図(S=1/100)

(1) ピット（P）及び柵列（SA）

２基以上のピット列として把握できる遺構が５組ある。これらの遺構をピット列1～5とし、その中で３基以上並ぶものを柵列（SA）として報告する。

ピット列１（SA1）

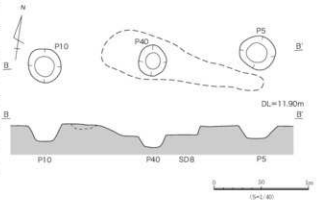
調査区中央部で検出した全長6.40mの柵列である。構成するピットは北からP2・1・37・9で、検出標高は11.69～11.85m、遺構の底面標高はP2が11.66m、P1が11.54m、P37が11.57m、P9が11.41mである。P1は後述するSX1の遺構床面で検出した。主軸方向はN－8°－Wである。柱穴は径0.34～0.38mの円形または不整円形で、深さは18～42cm、埋土は全て黒褐色粘土質シルトである。埋土中からは土師器細片が出土した。P2からは赤彩土師器細片が、P9からは８世紀の土師器供膳具細片が出土している。



第12図　ピット列１(SA1)　平面・エレベーション図(S=1/40)

ピット列２(SA2)

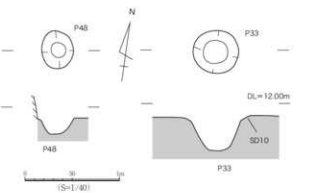
調査区南西で検出した2.30m以上の長さを持つ柵列である。柱間距離は1.2m、構成するピットは西からP10・40・5で、検出標高は11.79～11.80m、遺構の底面標高は11.58～11.67mである。主軸方向はN－77°－Eである。柱穴は径0.19～0.22mの円形で、深さは14～26cm、埋土は全て黒褐色粘土質シルトである。埋土中から遺物は出土していない。



第13図　ピット列２(SA2)　平面・エレベーション図(S=1/40)

ピット列３

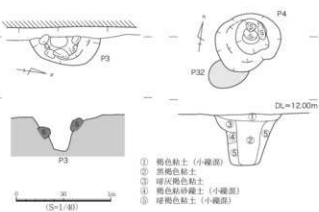
調査区北東隅で検出した2基のピット列である。柱間距離は2.06m、構成するピットは西からP48・33で、検出標高は11.84～11.88m、遺構の底面標高は P33が11.56m、P48が11.75m、主軸方向はN－63°－Wである。柱穴は径0.30～0.34mの円形または楕円形で、深さは13～28cm、埋土は黒褐色粘土質シルトである。P33の埋土中から土師器供膳具細片が出土している。古代の土師器で8世紀の遺物である。



第14図　ピット列３　平面・エレベーション図(S=1/40)

ピット列４

調査区東側中央部で検出した2基のピットである。柱間距離は2.10m、構成するピットは西からP3・4で、検出標高は11.82～11.86m、遺構の底面標高はP3が11.48m、P4が11.29m、主軸方向はN－85°－Eである。柱穴は検出面では0.60～0.70mの楕円形、下層で径0.42～0.46mの円形となる。深さは34～54cm、埋土は黒褐色粘土質シルトである。P4から土器細片が出土しているが、詳細な時期は不明。

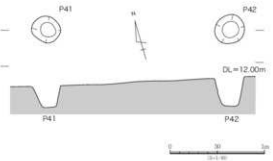


第15図　ピット列４　平面・セクション・エレベーション図(S=1/40)

２基とも遺構内から砂岩円礫が周囲壁面に張り付く形で検出された。遺跡周辺の地層中に含まれる自然礫で、厚みのある円礫と扁平な円礫が混在している。円礫の大きさは一辺12～17cm、厚さ7～12cm前後である。

ピット列５

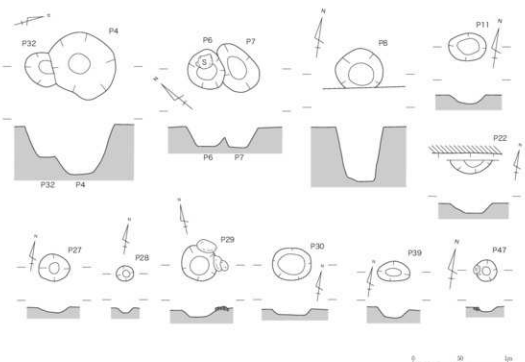
調査区東側南半で検出した２基のピットである。柱間距離は1.94m、構成するピットは西からP41・42で、検出標高は11.73～11.83m、遺構の底面標高は11.50～11.52mである。主軸方向はN－76°－Wである。柱穴は径0.28～0.32mの円形となる。深さは22～32cm、埋土は黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第16図　ピット列５　平面・エレベーション図(S=1/40)

その他のピット

その他のピットについて、主なものについては平面・エレベーション図を第17図に示す。掲載ピット以外については、遺構平面全体図と遺構計測表に記載する。(DL=12.00m)



第17図　その他のピット　平面・エレベーション図(S=1/40)

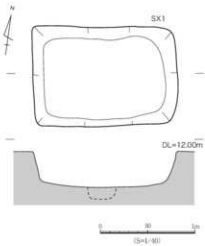
(2) 性格不明遺構（SX）

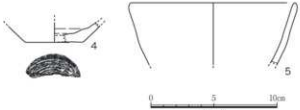
Ⅲ層上面の遺構面１で検出した遺構（SX1・3・4）とⅣ層上面の遺構面２で検出した遺構（SX2・5）がある。これらの遺構は、埋土に拳大より大きい砂岩円礫を多く含む共通の特徴を持つ。SX2は本発掘調査開始時の地層確認掘削の際検出したため、一部のみの確認にとどまり、全体像の把握はできていない。遺構形態からSX1と４は長方形の土坑、SX3は円形のピット、SX2と５は円形の土坑に分類できるが、ここでは円礫により埋め立てられた上層（遺構面１・２）検出という共通項を持つ遺構としてSXとして報告する。

SX1

調査区中央で検出した平面形が長方形の遺構である。検出標高は11.93～12.02mで、遺構の底面標高は11.64m、主軸方向はN－82°－Eである。深さは40cm、埋土は砂岩円礫により埋め立てられ、円礫の空隙を埋めるように褐色の粘土質シルトが堆積する。

試掘調査出土遺物も含め図示できた遺物は1～5の5点、他に土師器供膳具の細片3点と土師器甕1点が出土している。出土遺物は古代と近世の資料で、4は古代末（12世紀）の土師器杯、5は18世紀の肥前産呉器型碗である。





第18図　SX1　平面・エレベーション図(S=1/40)
出土遺物実測図(S=1/3)

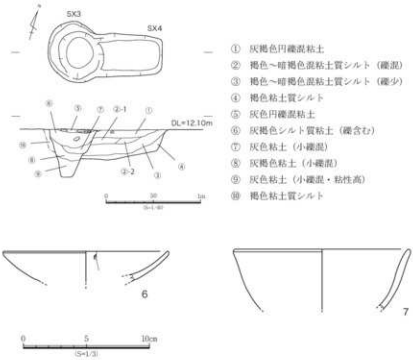
SX2

調査区西側で検出した円形の遺構である。断面は調査区西壁セクションで確認できるが、一部検出したのみで全貌はわからない。Ⅳ層上面で検出した円形の遺構で、検出標高は11.94m、遺構の底面標高は11.02m、深さは86cm、埋土は砂岩円礫と円礫の空隙を埋めるように褐色の粘土質シルトが堆積する。明褐色土と灰色土、黒褐色土が交互に堆積し、SX2の壁面を形成している。遺物は出土していない。

SX3

調査区南側で検出した平面形が円形の遺構である。検出標高は12.03mで、遺構の底面標高は11.48mである。深さは52cm、埋土は灰色（灰褐色）粘土あるいは粘土質シルトに円礫・小礫が混じる。遺構上層は20～30cm大の円礫を含み、隣接するSX4を切っている。

6の肥前産磁器・皿の口縁部が出土している。



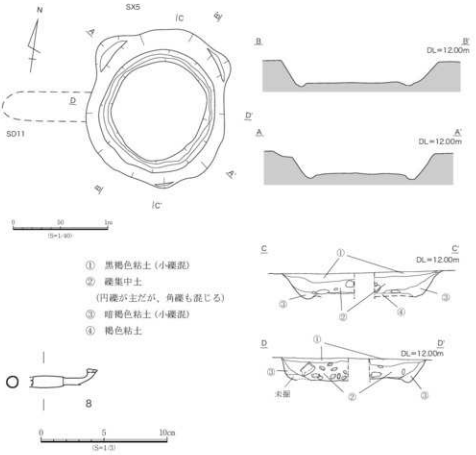
第19図　SX3・4　平面・セクション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3)

SX4

調査区南側で検出した平面形が長方形の遺構である。検出標高は11.98mで、遺構の底面標高は11.88m、主軸方向はN－70°－Eである。深さは24～32cm、埋土は上層が灰褐色粘土礫混層で、20～30cm大の円礫を含む。下層は褐色～暗褐色粘土質シルトで礫を含むが、下層ほど礫の量は少なくなる。出土遺物は7の陶器・呉器型碗の口縁部、尾戸焼で18世紀の資料である。

SX5

調査区南側西半で検出した平面形が円形の遺構である。検出標高は11.80mで、遺構の底面標高は11.50m、深さは26～30cm、円形の遺構の底面周縁部（径1.24m）には幅10～18cm、深さ4cm前後の規模の周溝をめぐらせる。埋土は第20図のとおりで、1層・3層にはそれぞれ黒褐色と暗褐色の小礫混じりの粘土が堆積、2層目に礫が集中する。検出された礫は円礫が中心だが、角礫も含まれている。遺構底面には褐色粘土の堆積が認められる。8のキセルと土器細片7点、須恵器甕2点、陶器1点が出土している。



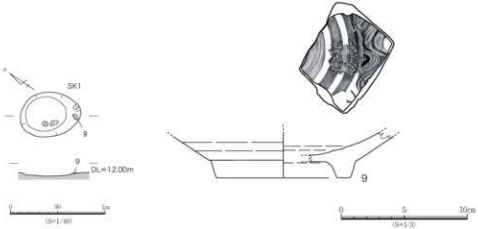
第20図　SX5　平面・セクション・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3)

(3) 浅い皿状の土坑（SK）

SK1～4の4基は検出面からの深さが10cm前後と浅いが、平面規模をもとに土坑として取り扱った。SK1は調査区南側、SK2～4は調査区北側東半に位置する。規模は長径が0.66～0.88m、短径が0.50～0.62mの楕円形、深さ6～12cmと浅い皿状の形態である。

SK1

長径0.66m、短径0.50mの楕円形で、検出面からの深さは6cm、SD1と切合い関係にあり、SD1の南端を切っている。主軸方向はN－72°－W、検出標高は11.88m、底面標高は11.82m、埋土は暗褐色粘土質シルトである。土坑南東隅から9の陶器が出土した。二彩唐津の鉢で、見込みに褐色・緑色釉で刷毛を用いて施文する。18世紀の遺物である。遺構埋土には拳大の円礫が数点含まれていた。



第21図　SK1　平面・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3)

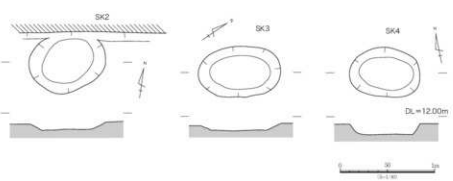
SK2～4

調査区北側東半に形成される。遺構が検出された面は礫を多く含むⅥ層上面だが、周囲にはⅣ・Ⅴ層が発達しておらず、他の地点の遺構面との先後関係は不明である。検出標高は11.89～11.90m、底面標高は11.79～11.83m、出土遺物はなく埋土は褐色～灰褐色粘土質シルトで、埋土中に小礫を含む。浅い皿状の土坑である。

SK2　主軸方向はN－58°－E、長径0.80m、短径0.62mの楕円形。検出面からの深さは8cm。

SK3　主軸方向はN－32°－E、長径0.88m、短径0.54mの楕円形。検出面からの深さは8cm。

SK4　主軸方向はN－67°－E、長径0.76m、短径0.54mの楕円形。検出面からの深さは12cm。

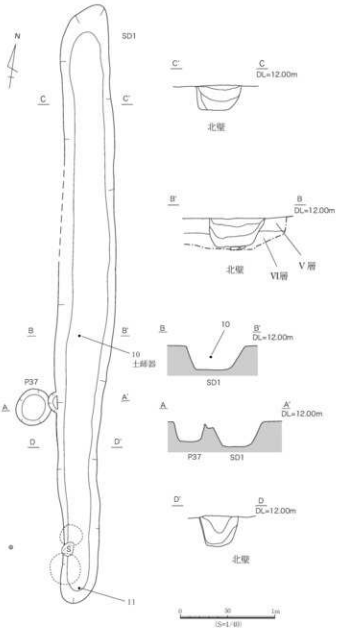


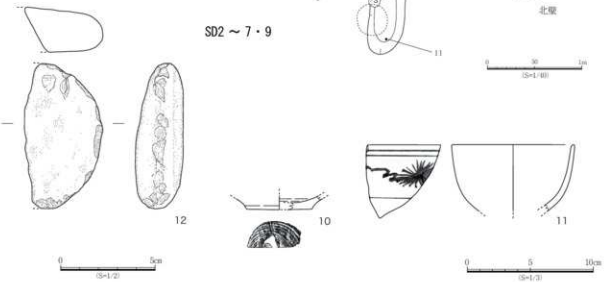
第22図　SK2～4　平面・エレベーション図(S=1/40)

(4) 溝状遺構（SD）

SD1

調査区中央部に位置する。南北方向に延びる遺構で、主軸方向はN－7～8°－Wで、幅0.40～0.60m、総延長6.35m、深さ26～40cmである。遺構の南端と北端は緩やかな傾斜で立ち上がる。細長い船底型の形状を持ち、遺構底面は北端11.66m、中央11.53m、南端11.60m、断面はU字形及び逆台形状を呈す。検出標高は11.78～11.85mで、埋土は暗褐色粘土質シルトである。埋土は3層に分層されるが、含まれる小礫の違いによる分層であり、ほぼ同時期に堆積した層だと考えられる。埋土中から10の土師器供膳具、11の磁器、12の敲石が出土した。10は杯底部で回転糸切痕の残る12世紀の遺物である。11は溝南端で出土した肥前産の丸碗で、18世紀末～19世紀の遺物だが、溝の上面から掘り込まれた別の遺物中に含まれた遺物の可能性がある。12は扁平な粗粒砂岩の敲石で被熱し赤く変色している。欠けて半円形を呈し、周縁に敲打痕が残る。





第23図　SD1　平面・セクション・エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

調査区北東に位置し、25cm前後の間隔で連続する遺構である。南北方向に延び、北側は調査区外へと続く。主軸方向はN－7～8°－Wで、幅0.12～0.24m、検出長0.90～2.08m以上で、SD2～4は調査区外へ延びている。深さ2～4cmとごく浅い溝状の遺構で、断面形は皿状を呈する。検出標高は11.86～11.89m、埋土は灰褐色粘土質シルトで、Ⅳ層上面に形成されている。埋土中からの出土遺物はない。

畠の畝を形成する際に生じた溝（凹状の地形）の痕跡だと考えられる。

溝状遺構の底面標高を比較すると、北側より南側が1～2cm前後低くなっている。

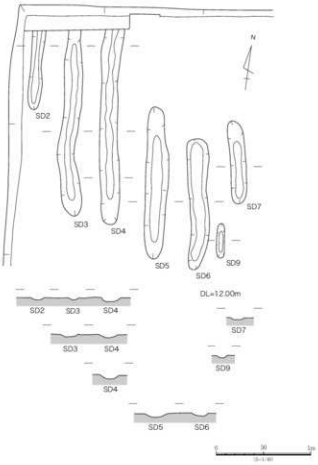
SD8

調査区南端に位置する。東西方向に延びる溝状遺構で、遺構中央付近の底面から柱穴(P40)を検出した。主軸方向はN－89°－Wで、幅0.18～0.30m、全長1.70m、深さ10～14cm、検出標高11.81mである。

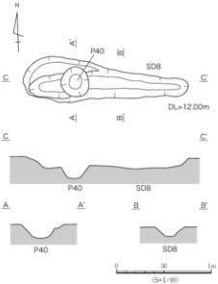
断面形はU字形を呈し、西側にテラス状の段を有する。埋土は黒褐色粘土質シルトである。埋土中から遺物は出土していない。

SD10

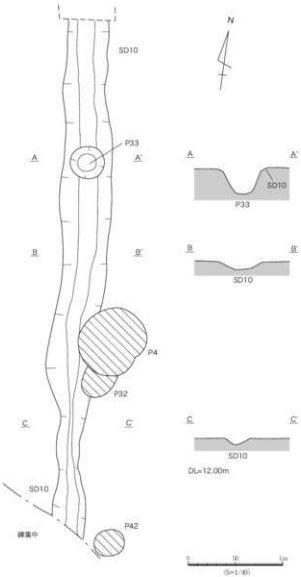
調査区北側東半に位置する。南北方向に延び、北側は調査区外へと続く。遺構の南側は調査区南西に堆積する礫混粘土層によって切られている。主軸方向はN－8°－Eで、幅0.28～0.49m、全長13.80m以上、深さ8～10cmである。SD2～7と平行に走る遺構で、断面形は浅い皿状である。検出標高は11.85～11.93mで、埋土は暗褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトである。埋土中から遺物は出土していない。



第24図　SD2～7・9　平面・エレベーション図(S=1/40)



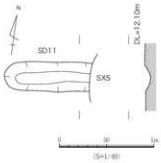
第25図　SD8・P40　平面・エレベーション図(S=1/40)



第26図　SD10・P33　平面・エレベーション図(S=1/40)

SD11

調査区南側に位置する。東西方向に延びる溝状遺構で、主軸方向はN－83°－E、SD1と垂直な遺構である。東側にSX5があり、SX5によって切られている。幅0.30～0.34m、検出長0.90m、深さ7cmであり、断面形は皿状を呈する。検出標高は11.91mで、埋土は黒褐色粘土質シルトである。埋土中から遺物は出土していない。



第27図　SD11　平面・エレベーション図(S=1/40)

(5) 包含層出土遺物

包含層からは、土師器供膳具74点、土師器煮炊具(甕)9点、須恵器供膳具16点、須恵器貯蔵具14点、製塩土器6点、黒色土器1点、貿易陶磁1点、土器細片65点、陶器4点、磁器11点、石器及び自然石37点が出土している。大半が細片あるいは小片だが、実測可能な資料のうち13～38の26点について図示した。

出土遺物は2つの時期、古代と近世の資料に分かれる。第28図は古代の遺物である。2点を除き、古代前期（8～9世紀）の資料になる。

13・14が須恵器の杯蓋・裾部の小片で、端部形状はわずかに肥厚が認められる14と、ほとんど肥厚が認められない13の2点で、近隣の下ノ坪遺跡の須恵器編年、古代I-4期からI-5期に相当する。15は土師器の杯蓋・裾部小片で、端部下端が肥厚、下ノ坪編年古代I-3期からI-4期の資料である。

16～18は須恵器供膳具で、16は椀、17は高台を持つ杯Bの底部、18は底部でヘラおこしの痕跡が確認できる。19は土師器供膳具の小片だが、口縁から底部まで確認できることから図化した。20は須恵器の鉢・口縁部で、口唇は水平面をなし、端部は外側に拡張する。21は須恵器甕で上胴部から口頸部まで残る。口唇は外面が丸く肥厚、頸部は強く屈曲し外上方へ大きく開く。外面細かい平行タタキのちナデ。肩部内面に同心円状の当て具痕（青海波文）が残る。横方向の強いナデで仕上げる。

22は土師器甕・口縁部で口縁端部は上方へ立ち上がる。23～27は製塩土器で、内面に布目圧痕が残る。古代の焼塩壺に相当するⅡ類製塩土器である。24は口縁部で、口唇がわずかに内側へ屈曲する。25は器壁が14㎜の厚みを持つ厚手の製塩土器である。

古代の遺物の中で、図示していない遺物に赤彩土師器がある。グリッドA-3・4のⅢ層から出土した小片と、遺構P2（SA2-P1）から出土した小片の2点だけだが、製塩土器とともに律令期の遺跡周辺の性格を物語る遺物である。一定量出土した8～9世紀前半・古代前期の遺物に対し、少量ではあるが古代後期の遺物も出土している。図示できない小片で、遺物包含層Ⅲ～Ⅳ層から出土した内黒の黒色土器・椀で、胎土に微細ガラス質鉱物を含んでいる。厚さ3㎜、内面のミガキもよく残るが、胎土から在地だと考えられる。9世紀末以降の資料である。

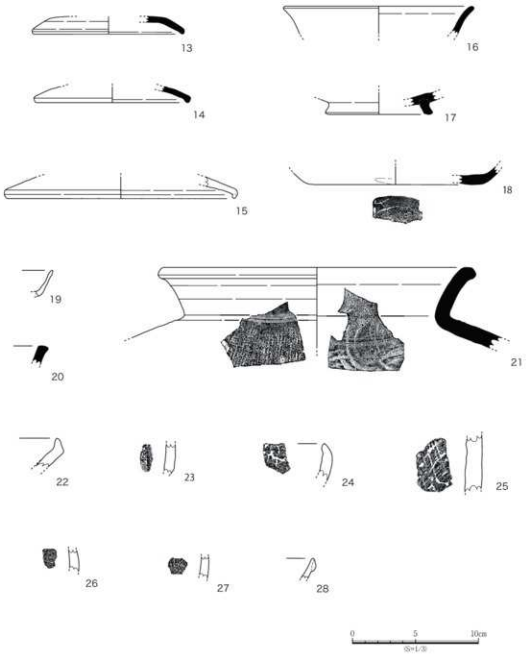
古代末の遺物も包含層出土資料の中に2点ある。1点は16の須恵器椀で11世紀前後の資料、もう1点は28の白磁碗・口縁部であり、玉縁状の口縁を持つ白磁Ⅳ類、12世紀の資料である。同時期の遺物は、遺構出土資料にもある。SX1とSD1から出土した土師器杯（第18図、第23図）は、底部回転糸切痕と形状から12世紀と考えられる。

第29図が近世の包含層出土資料と石器である。近世と判断可能な遺物15点中9点を図化した。出土した石・礫の中で使用痕の観察できる「石器」はほとんどない。遺構内出土の円礫（自然石）については遺物として一部計測している。

29～35が磁器、36・37が陶器、38が砂岩棒状礫を素材とした敲石である。29は広東碗で外面に2条の圏線と草花文を持つ。肥前産で19世紀前半の資料である。30～32が皿・口縁部、30と32は肥前産で19世紀以降の遺物、31は産地不明だが、見込みの文様が濃茶緑色に発色する特徴を持つ近世後期以降の遺物、33は皿・底部、肥前産（波佐見）で18世紀、見込み蛇ノ目状釉ハギで砂が付着している。34は丸碗・底部、在地産（能茶山）で幕末（19世紀第2四半期）の遺物である。35は瓶・底部、肥前産で近世後期～幕末（19世紀）、体部外面に2条、高台外面に1条の圏線を持ち、

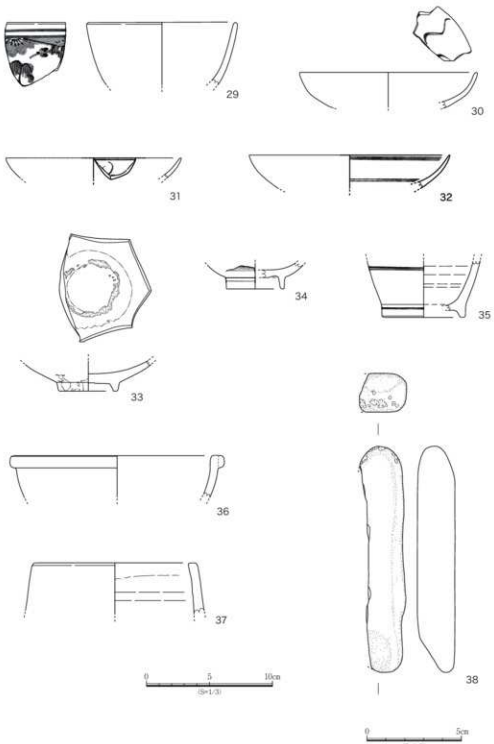
内面は露胎する。36 は陶器の鉢で端部外面が玉縁状に肥厚する。産地は明らかではないが、近世後期以降の資料だと考えられる。37 は鉄釉の灰入れ（陶器）、口唇は水平面をなし、使用時の敲打によると考えられる傷痕が残る。近世以降の可能性のある資料である。38 は砂岩の敲石。棒状不整円礫の両端に敲打痕が認められる。

第 28 図に図示した遺物のうち、古代前期（8～9 世紀）の遺物の出土層位は、Ⅱ層が 24、Ⅲ・Ⅳ層がⅢ・Ⅳ層が 21・27、Ⅲ層が 13～15・22・26、Ⅳ層が 17～20・23・25 であり、古代末（11～12 世紀）の遺物の出土層位は、Ⅲ・Ⅳ層が 28、Ⅳ層が 16 である。



第28図　包含層出土遺物実測図１　　古代(S=1/3)

第 29 図に図示した遺物のうち、近世資料の出土層位は、Ⅰ層が 32、Ⅱ層が 29・36、Ⅱ・Ⅲ層が 30・35、Ⅲ層が 31・33・34・37 となる。包含層Ⅳ層からは近世の遺物は出土していない。



第29図　包含層出土遺物実測図２　　近世陶磁器(S=1/3)及び石器(S=1/2)

第Ⅳ章　考察　（高田遺跡調査のまとめ）

1. 遺構

今回調査した遺構検出面は3面あり、上層から順番に第1遺構面（Ⅲ層上面）、第2遺構面（Ⅳ層上面）、第3遺構面（Ⅴ層・Ⅵ層上面）として調査を進めた。上2つの面は灰褐色土が遺構埋土、下の面は黒褐色土が遺構埋土となる。遺構出土遺物は僅少であり、多くの遺物が包含層出土資料である。確認された遺構は柱穴（ピット）41基、土坑4基、性格不明遺構5基、溝状遺構11条である。

ピットのうち5組のピットが、柵列あるいは掘立柱建物を構成する「ピット列」と考えられるもので、3基以上並ぶピット列については柵列(SA)とした。土坑(SK)4基は、いずれも長径1mに満たないもので、深さ10cm前後の浅い皿状を呈する遺構である。

円礫が多量に投棄された遺構5基を性格不明遺構(SX)として調査・報告した。これらの遺構は、長方形あるいは円形の平面形を有する土坑あるいはピットであり、①直径1m以上の規模を有する円形土坑(SX2・SX5)、②幅0.7～1.1m、長さ1.7～1.9mの規模の長方形の土坑(SX1・SX4)、③円形のピット状の遺構(SX3)の3つに分けられる。①は第2遺構面、②と③は第1遺構面に形成された遺構である。

溝状遺構(SD)にはⅣ層上面(第2遺構面)に形成されたSD2～7・9と南側の溝状遺構SD8・11、Ⅴ層上面で検出された溝状遺構SD1・10がある。上層で検出されたⅢ層を埋土とする溝状遺構は、南北方向の溝が連続する一連の遺構で、畠の畝の低い部分が凹状に掘られた溝状の落ち込みと考えられる遺構である。

第1遺構面(Ⅲ層上面)の遺構

SX1(長方形土坑)・SX3(円形のピット)・SX4(長方形土坑)

第2遺構面（Ⅳ層上面）の遺構

SX2・5(円形土坑)、ピット(P6・7・14・19・20　他)、SK1(浅い皿状土坑)

SD2～7・9(畠の畝状遺構・凹状に掘り込まれた溝)

第3遺構面（Ⅴ層及びⅥ層上面）の遺構

SA1(P1・2・9・37)、SA2(P5・10・40)、ピット列3～5(P33・48、P3・4、P41・42)

ピット(P8・11・22・39・43～47・49・51・52)、SD1・8・10・11

出土した遺物から推定される遺構形成時期は、第1遺構面と第2遺構面が近世後期以降、第3遺構面が近世後期及び古代となる。第3遺構面には近世と古代の遺構が混在している。出土遺物から詳細な時期を特定できる遺構は少ない。

2. 遺物

(1)古代

① 古代前期(8～9世紀前半)
須恵器供膳具、須恵器貯蔵具、土師器供膳具、土師器煮炊具、赤彩土師器、製塩土器

② 古代後期(9世紀後半以降)
黒色土器(土師器・須恵器)

③ 古代末(11～12世紀)
貿易陶磁(白磁Ⅳ類)、土師器供膳具(杯・糸切底)

(2)近世

近世後期(18～19世紀前半)
肥前産及び在地産(尾戸、能茶山)の陶磁器類、備前の擂鉢(炻器)

3. 高田遺跡調査のまとめ

今回の調査では調査地点から複数の遺構面が確認され、柱穴や土坑、溝状遺構が検出された。出土遺物は合計300点と少量ではあるが、遺跡の性格を知る手がかりとなる遺物も出土している。明らかになったいくつかの事実を示して調査のまとめとしたい。

(1)検出された遺構面

3面の遺構面が確認され、調査区周辺が柱穴を伴う掘立柱建物跡あるいは柵列等の施設がある生活領域だったことが明らかになった。少なくとも、古代(8～9世紀)、古代末(11～12世紀)、近世後期(18～19世紀)の3時期には遺構が形成され、何らかの建物(施設)が存在していた。

3つの遺構面と上記の3時期は対応していない。上面の2面は近世後期以降の比較的新しい時期に形成された遺構面である。3面目の遺構面には近世から古代までの遺構が混在している。

(2)古代の遺物からみた遺跡の性格

古代前期の遺物で特筆されるのは、製塩土器・赤彩土師器の存在である。これらの遺物は一般集落と異なる官衙関連遺跡から出土する例が多い。高田遺跡は高規格道関連の発掘調査で古代の官衙関連遺跡であることが明らかになった。当遺跡の古代官衙関連の領域は、高規格道予定地から60m以上南にあたる今次調査地点付近まで広がっていた。

さらに、注目される遺物に黒色土器がある。小片で図示できなかったが、内黒の在地産黒色土器であり、9世紀末以降の遺物である。調査地点の官衙関連領域が、古代前期(律令期)だけでなく、古代後期まで継続することを示しており、高田遺跡や西野遺跡から出土した東海系緑釉陶器との関連を想起することのできる資料である。

(3)古代末(12世紀)の遺構

SD1は長さ6.35mの溝状の形態を持つ遺構で、古代末と近世の遺物が出土している。近世の遺物について、SD1出土遺物として報告した。しかしSD1の南端付近には、この遺構と類似した埋土の遺構が重なり合って形成されている。調査時には判断できなかったが、近世の遺物は周辺遺構の切合いにより上層から混入した遺物の可能性が高い。遺物が少なく断定はできないが、他の出土遺物からSD1は古代末(12世紀)の遺構だと考えられる。

この溝状遺構SD1に隣接して平行なピット列(SA1)、直交するピット列(SA2)などの遺構が確認されている。SA1は総延長6.4mであり、SD1とほぼ同じ規模である。

(4)円礫で埋め立てられた遺構

性格不明遺構として提示した遺構(SX)は、形態から土坑あるいはピットに分類され、いずれも円礫によって埋め立てられるという共通点を持つ。5基のうち3基は第1遺構面、2基は第2遺構面と新しい時期の遺構面であり、近世後期以降に形成されたものである。

(5)残存する畠の畝状地形

現状の水田となる前の一時期(Ⅲ層上面)、調査地点が畠として利用されていた時期がある。浅い凹状の溝状遺構として検出したSD2～7・9が、畠の畝状地形の残存遺構である。

(6)近世後期の出土遺物～近世野市台地の開発

近世前期、野中兼山の執政期に野市台地が開発され、600町歩の水田が開かれたことは広く知られている。しかし、野市台地の開墾・開発がどのように進んだのか、その具体像を示す史料は残念ながら残っていない。

近年の野市台地上の発掘調査で、比較的広い範囲の調査を行い、近世の調査成果が報告された遺跡に東野土居遺跡と高田遺跡がある。野市台地の西側(高田遺跡)と東側(東野土居遺跡)、いずれも高規格道関連の調査である。近世の開発がどの時期に進んだのか、地点ごとの情報が今後の近世景観復原の大きな手がかりとなる。東野土居遺跡の調査では、東野地区の高規格道建設予定地付近が18世紀後半以降に耕作地化されたというご教示をいただいた。また、高田遺跡の高規格道予定地で出土するのは18世紀以降の遺物である。

今回の出土遺物も18～19世紀に限定される。現在の調査資料はまだまだ少なく、野市台地の開発の進展について、詳細な具体像を描くことはできない。今回の調査地点と同様、野市台地の広い範囲で、「18世紀」あるいは「18世紀後半」が画期となって、それ以降の時期の出土資料のみが確認される近世集落の例が増えている。今後の資料の蓄積により、集落が形成され、開発が進展していく状況が明らかになる可能性がある。

遺構計測表

遺構計測表1　SA及びピット列

遺構名	主軸方位	柱穴数	総長（m）	柱間寸法（m）	柱径（m）	備考
ピット列1（SA1）	N－8°－W	4	6.40	2.08～2.20	0.34～0.38	
ピット列2（SA2）	N－77°－E	3	2.30	1.10～1.14	0.19～0.22	
ピット列3	N－63°－W	2	－	2.06	0.30～0.34	
ピット列4	N－85°－E	2	－	2.10	0.60～0.70	
ピット列5	N－76°－W	2	－	1.94	0.28～0.32	

遺構計測表2　ピット列1（SA1）

遺構番号	柱間距離	規模（m）			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SA1- P1（P2）	2.72（SA1-P2）	0.46	0.40	0.18	不整円形	赤彩土師器（8C）、土器細片	
SA1- P2（P1）	2.51（SA1-P3）	0.38	0.36	0.30	円形	－	
SA1- P3（P37）	2.88（SA1-P4）	0.38	0.38	0.20	円形	－	
SA1- P4（P9）	－	0.38	0.32	0.42	円形	土師器供膳具（8C）	

※柱間距離は（　）のピットまでの距離

遺構計測表3　ピット列2（SA2）

遺構番号	柱間距離	規模（m）			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SA2- P1（P10）	2.72（SA2-P2）	0.38	0.34	0.19	円形	－	
SA2- P2（P40）	2.51（SA2-P3）	0.34	0.30	0.26	円形	－	
SA2- P3（P5）	－	0.39	0.36	0.14	円形	－	

※柱間距離は（　）のピットまでの距離

遺構計測表4　ピット列3～5

遺構番号	柱間距離	規模（m）			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
ピット列3（P48）	2.06（P33）	0.34	0.30	0.13	楕円形	－	
ピット列3（P33）	－	0.42	0.40	0.28	円形	土師器供膳具（8C）	
ピット列4（P3）	2.10（P4）	0.40	0.40	0.34	円形	土器細片、砂岩円礫	
ピット列4（P4）	－	0.42	0.40	0.54	円形	土器細片	
ピット列5（P41）	1.94（P42）	0.28	0.32	0.22	円形	－	
ピット列5（P42）	－	0.32	0.34	0.32	円形	－	

※柱間距離は（　）のピットまでの距離

遺構計測表5　その他のピット

遺構番号	規模（m）			平面形	出土遺物・備考
	長径	短径	深さ		
P6	0.45	0.38	0.23	円形	－
P7	0.67	0.42	0.24	楕円形	－
P8	0.50	0.48	0.58	円形	土器細片2
P11	0.42	0.30	0.11	楕円形	－
P22	0.48	－	0.12	楕円形	一部調査区外
P24	0.18	0.14	0.06	楕円形	－
P27	0.34	0.30	0.08	楕円形	－
P28	0.19	0.17	0.06	円形	－
P29	0.38	0.38	0.10	円形	－
P30	0.42	0.36	0.08	楕円形	－

遺構番号	規模（m）			平面形	出土遺物・備考
	長径	短径	深さ		
P32	0.40	0.38	0.35	不整円形	P4に切られる
P39	0.36	0.22	0.10	楕円形	－
P43	0.26	0.26	0.04	円形	－
P44	0.18	0.16	0.06	楕円形	－
P45	0.28	0.22	0.06	楕円形	－
P46	0.34	0.30	0.12	不整円形	－
P47	0.22	0.22	0.03	円形	－
P49	0.36	0.28	0.06	楕円形	－
P51	0.38	0.38	0.12	円形	－
P52	0.26	0.22	0.08	楕円形	－

遺構計測表6　SX　土坑あるいはピット

遺構番号	主軸方向	規模（m）			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX1	N－82°－E	1.52	1.02	0.40	長方形	土師器甕、製塩土器、土師器供膳具、肥前産総器・呉器型碗、備前擂鉢。	長方形の土坑
SX2	円形（推定）	－	－	0.86	円形	－	セクション図に断面有
SX3	円形	0.66	0.62	0.52	円形	肥前産（波佐見）総器・皿、18C。	Ⅲ層上で検出 SX4を切る
SX4	N－70°－E	1.70～	0.46	0.24～0.32	長方形	在地産（尾戸）陶器・呉器型碗、18C。	Ⅲ層上で検出 SX3に切られる
SX5	円形	1.56	1.50	0.26～0.30	円形	キセル、土師器細片、須恵器、近世陶器。	円形の土坑 底面径　1.24 m

遺構計測表7　SK　浅い皿状土坑

遺構番号	主軸方向	規模（m）			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N－72°－W	0.66	0.50	0.06	楕円形	陶器（二彩唐津・鉢　18C）	浅い皿状の形態
SK2	N－58°－E	0.80	0.62	0.08	楕円形	－	浅い皿状の形態
SK3	N－32°－E	0.88	0.54	0.08	楕円形	－	浅い皿状の形態
SK4	N－67°－E	0.76	0.54	0.12	楕円形	－	浅い皿状の形態

遺構計測表8　SD　溝状遺構

遺構番号	主軸方向	規模（m）			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N－7～8°－W	6.35	0.40～0.60	0.26～0.40	土師器甕、被熱赤変砂岩敲石、土師器杯（糸切底）、総器丸碗	Ⅵ層上
SD2	N－7°－W	(0.85)	0.12～0.16	0.02	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD3	N－7°－W	(2.00)	0.12～0.20	0.02	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD4	N－8°－W	(2.08)	0.16～0.20	0.02～0.04	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD5	N－7°－W	(1.60)	0.18～0.20	0.02～0.04	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD6	N－8°－W	(1.40)	0.16～0.24	0.02～0.03	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD7	N－8°－W	(0.90)	0.16～0.18	0.02	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD8	N－89°－W	(1.70)	0.18～0.30	0.10～0.14	－	Ⅵ層上
SD9	N－8°－W	(0.40)	0.08～0.10	0.02～0.03	－	畝状遺構の凹部（Ⅳ層上）
SD10	N－8°－E	(5.60)	0.28～0.44	0.08～0.10	－	Ⅵ層上
SD11	N－83°－E	(0.90)	0.30～0.34	0.07	－	Ⅵ層上・SX5により切られる

遺物観察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については(　)で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
石製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4　日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
1	SX1	製塩土器 胴部	－	(2.4)	－	橙 にぶい黄橙 灰	内面に布目痕が残る。胎土に径2mm以下のチャート砂粒を多く含む。	古代 8～9C
2	SX1	陶器 皿・底部	－	(2.8)	(5.8)	灰白 灰白 灰白	肥前産染付皿。呉須が緑に発色、見込み蛇ノ目状釉ハギ。外底骨み付けは露胎する。	18～19C 肥前
3	SX1	須恵器 擂鉢・底部	－	(3.7)	(8.0)	灰赤 にぶい赤褐 にぶい赤褐	備前擂鉢の底部。底面付近まで条線が入る。条線の単位は6条以上。	近世以降 備前
4	SX1 №1	土師器 杯・底部	－	(1.6)	(4.8)	橙 橙 にぶい黄橙	底部回転糸切痕。古代末の土師器供膳具。	12C
5	SX1 №2	陶器 碗・口縁部	(13.0)	(4.9)	－	灰白 灰白 灰黄	呉器型碗。釉調はやや緑がかった灰白色。	18C 肥前
6	SX3	瓦器 皿・口縁部	(13.2)	(2.4)	－	灰白 灰白 灰白	釉調は灰白色。肥前産（波佐見の可能性）。内面に呉須で施文。	18C 肥前
7	SX4	陶器 碗・口縁部	(13.8)	(4.8)	－	浅黄 浅黄 灰黄	呉器型碗。釉調は灰黄色。在地の製品。	18C 堀戸
8	SX5	キセル 雁首～吸口	吸口径 (0.8)	頭部径 (0.5)	雁首元径 (0.9)	－	銅製。全体に緑青が浮き だし、緑に発色する。雁首から吸口まで5.7cmが残る。	
9	SK1	陶器 鉢・底部	－	(3.3)	(10.6)	浅黄 にぶい橙 にぶい橙	二彩唐津の鉢。見込みに刷毛で施文。緑色、褐色の釉を用いる。	18C 唐津
10	SD1	土師器 杯・底部	－	(1.1)	(5.2)	橙 橙 橙	底部回転糸切痕。古代末の土器。	12C
11	SD1	瓦器 丸碗・口縁部	(9.8)	(5.3)	－	明緑灰 明緑灰 灰白	口縁外面に2条、腰部に1条の圏線。19世紀前半を中心とした時期。	18C末～19C 肥前
12	SD1	敲石 粗粒砂岩	長さ (5.7)	幅 (4.2)	厚 2.3	－	被熱赤変砂岩。扁平な円礫（粗粒砂岩）素材。周縁に剥離が認められる。	15～16C
13	A3・4 Ⅲ層	須恵器 壺・裾部	－	(1.4)	裾部 (11.8)	黄灰 黄灰 黄灰	須恵器・壺の裾部小片。端部形状から、下ノ坪遺跡古代Ⅰ-5期の資料だと判断される。	8C中葉
14	A2・3 Ⅲ層	須恵器 壺・裾部	－	(1.3)	裾部 (12.0)	灰白 灰白 灰白	須恵器・壺の裾部小片。端部形状から、下ノ坪遺跡古代Ⅰ-4・5期の資料だと判断される。	8C中葉
15	A3・4 Ⅲ層	土師器 壺・裾部	－	(1.7)	裾部 (18.0)	にぶい橙 にぶい黄橙 橙	土師器・壺の裾部小片。端部形状から、下ノ坪遺跡古代Ⅰ-3・4期の資料だと判断される。	8C中葉
16	検出時 №2	須恵器 椀・口縁部	(15.0)	(2.2)	－	浅黄 灰黄 灰黄	体部は内湾して立ち上がる。	古代末 11～12C
17	検出時 №8	須恵器 杯・底部	－	(1.8)	(8.6)	灰 灰 灰黄	高台を持つ須恵器供膳具（杯B）。高台はハの字状に大きく開く。	8C中葉～ 9C前半
18	調査区北 V層上	須恵器 杯身・底部	－	(1.4)	(14.0)	灰 灰 灰黄	底部ヘラ切。	8C
19	検出時 №2	土師器 杯・口縁～底部	－	2.2	－	にぶい黄橙 浅黄橙 浅黄橙	体部は直線的に、外上方へ立ち上がる。	古代
20	包含層	須恵器 鉢・口縁部	－	(1.5)	－	灰黄褐 黄灰 暗灰黄	口唇は面をなし、端部外方が拡張する。	古代

番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
21	調査区南西 Ⅲ・Ⅳ層	須恵器 甕 口縁～上胴部	(24.0)	(6.4)	－	灰黄 黄灰 暗灰黄	頸部でくの字状に強く屈曲、口縁部は外反する。口縁端部外面は肥厚する。外面は平行タタキ＋ナデ。内面に同心円状の当て具痕（青海波文）が残る。	古代
22	A3・4 Ⅲ層	土師器 甕・口縁部	－	(2.3)	－	褐灰 にぶい黄橙 にぶい黄橙	古代の甕口縁。端部は短く屈曲し、上方へ立ち上がる。胎土に長石粒を含む。	古代
23	調査区北 Ⅴ層上	製塩土器 胴部	－	(2.4)	－	にぶい黄橙 橙 にぶい橙	2mm大の砂粒、微細砂粒を多く含む。内面に布目圧痕が残る。	古代 8～9C
24	B2 検出面 Ⅲ層上	製塩土器 口縁部	－	(3.0)	－	黄橙 黄橙 黄橙	0.5mm前後のチャート砂粒を多量に含む。2～4mm大の砂粒あり。口縁先端を細く仕上げる。	古代 8～9C
25	Ⅳ層	製塩土器 胴部	－	(4.5)	－	にぶい黄橙 にぶい黄橙 黄灰	器壁は14mm、厚みのある製塩土器。内面に布目圧痕が残る。	古代 8～9C
26	TR2 東 Ⅲ層	製塩土器 胴部	－	(1.7)	－	にぶい黄橙 灰黄褐 灰黄褐	内面に布目圧痕が残る。小片。	古代 8～9C
27	Ⅲ・Ⅳ層	製塩土器 胴部	－	(1.7)	－	にぶい黄橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	0.5～2mm大のチャート砂粒を多量に含む。厚さ6～7mm。	古代 8～9C
28	Ⅲ・Ⅳ層	白磁 碗・口縁部	－	(1.6)	－	灰白 灰白 灰白	口縁部は玉縁状に肥厚する。貿易陶磁（白磁Ⅳ類）。	12C
29	南 Ⅱ層	磁器 碗か皿・口縁部	(11.6)	(5.0)	－	灰白 灰白 灰白	口縁部外面に2条の圏線、外面に草花文を施文する。	近世後期～幕末 19C 前半 肥前
30	Ⅱ・Ⅲ層	磁器 皿・口縁部	(14.0)	(2.8)	－	明緑灰 明緑灰 灰白	内面、呉須により施文。釉調は灰白色。	近世後期～幕末 19C 以降 肥前
31	A2・3 Ⅲ層	磁器 皿・口縁部	(14.0)	(1.6)	－	灰黄 灰黄 灰黄	内面に1条の圏線と文様を施文する。圏線と文様は濃茶緑色に発色する。	近世後期以降
32	南 1層	磁器 皿・口縁部	(16.0)	(2.7)	－	灰白 灰白 灰白	口縁内面に帯状の圏線、見込みに2条あるいは3条の圏線を施文する。	近世後期以降 19C 以降 肥前
33	南（東半） Ⅲ層	磁器 皿・底部	－	(2.4)	4.6	明緑灰 灰白 灰白	削り出しにより外底部を成形する。見込み蛇ノ目状釉ハギ、砂付着。	18C 肥前（波佐見）
34	TR2 東 Ⅲ層	磁器 丸碗・底部	－	(2.1)	(4.5)	灰黄 灰黄 灰白	高台外面に圏線1条あり。	幕末 19C 第2四半期 能茶山
35	Ⅱ・Ⅲ層	磁器 瓶・底部	－	(4.5)	(6.7)	にぶい橙 にぶい黄橙 にぶい黄橙	体部外面に2条、高台外面に1条の圏線。内面は露胎する。	近世後期以降 肥前
36	B2 検出面 Ⅲ層上	陶器 鉢・口縁部	(15.2)	(3.3)	－	灰黄褐 灰黄褐 赤褐	口縁部外面は玉縁状に肥厚し、口唇は水平面をなす。口唇は釉ハギにより露胎する。体部外面を刷毛目により加飾。	近世後期以降
37	Ⅲ層	陶器 灰入・口縁部	(11.8)	(4.1)	－	にぶい橙 灰褐 にぶい橙	鉄釉の灰入。内面にロクロ目。口唇は水平面をなし、使用時（灰入れの際）の敲打によると推定される傷跡が残る。	近世後期以降
38	南 Ⅲ層	敲石 砂岩棒状礫	(12.0)	(2.0)	(2.0)	－	砂岩、棒状の不整円礫の両端に敲打痕が認められる。	

写真図版

調査に参加した方々

調査前の景観（北東より）

調査前の景観（南東より）

試掘 TR1　堆積状況と景観（東より）

試掘 TR1　堆積状況（東より）

試掘 TR2　SD1 検出（東より）

試掘 TR2　SD1 検出（西より）

試掘 TR1（東より）

試掘 TR2（南より）

写真図版　2

表土掘削（南より）

調査区の設定　南西端（西より）

南西端サブトレと SX2 の検出（東より）

SX3・4 検出（南より）

SX2 断面と調査区西壁の堆積（東より）

試掘 TR2 西壁セクション

試掘 TR2 南壁セクション

SX1　遺物出土状況

SX1 遺構西半の礫検出状況

SX1 と P1　（東より）

SX3・4 セクション（南より）

SX3・4 遺構と堆積状況（南より）

SX1 西半の礫と検出された SD1（東より）

SX1 完掘状況（西より）

検出された SD1 と SX1 完掘状況（東より）

調査風景（調査区南端）

調査風景（SX3・4）

調査風景（SX1）

調査風景（調査区南西端）

調査風景（調査区中央）

調査風景（SX3）

調査風景（包含層掘削作業）

調査風景（下層遺構検出作業）

調査区南の検出遺構　SK1・P9（西より）

SK1 遺物出土状況（東より）

調査区南西の検出遺構（西より）

調査区北東の検出遺構（北より）

調査区北西の検出遺構（南より）

調査区北壁セクション（南より）

検出遺構　遺構面３（南より）

検出遺構　遺構面３（北東より）

検出遺構　遺構面３（南東より）

SD1 堆積状況（北より）

SD1 と周辺の遺構（南より）

SD1 と周辺の遺構（北より）

P3 遺構内円礫出土状況

P4 遺構内円礫出土状況

調査区南端の遺構調査

SX5 の調査

SX5（南東より）

SX5（南より）

遺構完掘状況（西より）

遺構完掘状況（北東より）

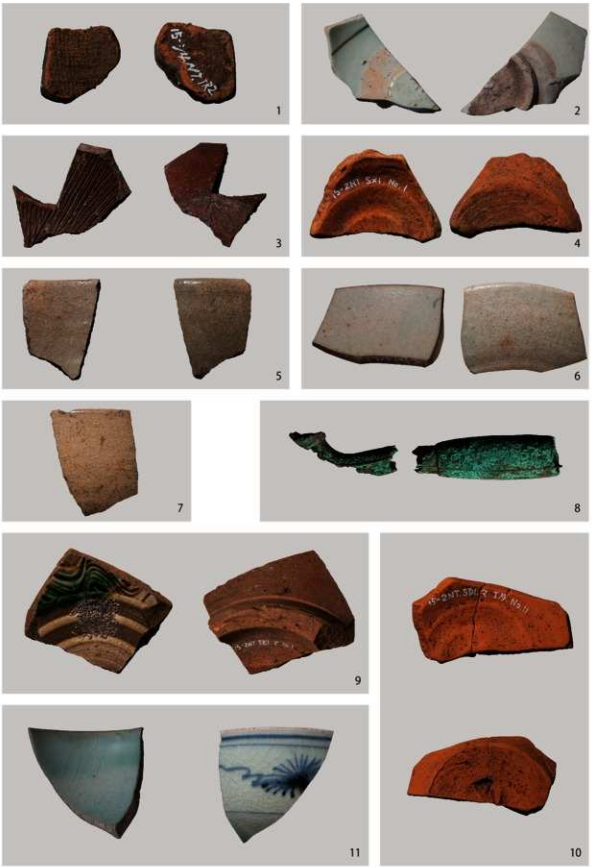
遺構完掘状況（北より）

遺構完掘状況（北西より）

遺構完掘状況（南より）

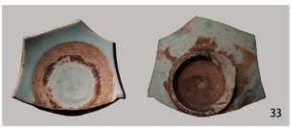
遺構完掘状況（東より）

遺構完掘状況（北より）



遺構出土遺物　　SX1(1 ～ 5)　SX3(6)　SX4(7)　SX5(8)　SK1(9)　SD1(10・11)

包含層出土遺物（1）　古代



包含層出土遺物（2）　近世陶磁器及び石器（遺構出土石器含）　SD1(12)

報告書抄録

ふりがな	たかだいせき
書名	高田遺跡
副書名	個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	松村信博
編集機関	香南市文化財センター（香南市教育委員会）
所在地	〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1　TEL0887-54-2296
発行年月日	2020年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかだいせき 高田遺跡	〒781-5235 こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょうしもい 野市町下井	39211	200025	33° 33′ 17″	133° 41′ 21″	試掘 2015.8.3 本発掘 2015.8.24 ～9.28	9㎡ 64㎡	高規格道路建設計画に伴う住居移転（個人住宅建築）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田遺跡	集落跡	古代前期 近世後期	柵列 ピット 土坑 溝状遺構	製塩土器 土師器 須恵器 貿易陶磁（白磁） 陶器 磁器 炻器	製塩土器・赤彩土師器・黒色土器出土 古代末の溝状遺構と柵列

要約

古代前期（8～9世紀）の遺物を確認した。製塩土器・赤彩土師器など遺跡の性格を示す遺物が出土している。高規格道の調査で明らかになった官衙的な性格を持つ高田遺跡の生活領域が、遺跡南半の今次調査地点まで広がることが明らかになった。また、黒色土器（9世紀末以降）が出土しており、この領域は古代後期まで継続したと考えられる。

近世の遺物は陶磁器類など18世紀後半から19世紀前半のものが中心である。調査区周辺で確認された遺物は、同時期の資料が大半で、この時期に開拓が進み集落が形成されたと推定される。現在は水田として利用されており、水田化される前に畠として利用された時期があったことを示す畝状遺構の凹部（溝状遺構）が確認されている。

高知県香南市発掘調査報告書 第16集

高田遺跡

個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年3月19日

発行　香南市文化財センター（香南市教育委員会）
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1
TEL　0887-54-2296
印刷　高知県香南市野市町西野45
半田印刷